

らくごにみるにほんのたびぶんか

#44 落語にみる日本の旅文化

作者：旅の文化研究所（たびのぶんかけんきゅうじょ）

刊行：平成7年（1995）

📖 解題

■ 内容

『落語に見る日本の旅文化』は、旅の文化研究所の特定研究プロジェクト「落語社会における旅の伝承」の研究成果として刊行された。収録内容は、「大山詣りと講社の旅」（神崎宣武）、「伊勢詣りと伊勢音頭」（小野寺節子）、「落語における旅の心理」（小田晋）、「異界への旅」（宮田登）が研究発表に沿った執筆であり、絵解き 伊勢参宮名所図会（神崎宣武、菌部澄）と「女の旅」、「江戸の物見遊山」の2つのコラム（坂口福美）により、研究発表の補足をしている。また、落語における「旅もの」を取り上げることから、「旅ものとその演じ方」（桂南喬）を演者の立場から論じて、本書の序章としている。



[384.37/12]

大山を論じた「大山詣りと講社の旅」の中で、江戸時代の庶民の旅は「寺社詣で」を方便として、往路に限っては精進し、参拝を済ませると、湯治や周辺の観光を楽しみ、精進落としと称して宴会をもったり遊郭で遊んだりすることなどが定例化していた、としている。そのような寺社詣での一つとして、江戸から近い霊山である大山に詣でることが盛んになった。この大山詣りの帰路に神奈川宿へ泊った一行が酒宴に興じ、喧嘩騒ぎを起こした挙句酔いつぶれた一人の頭を剃って置いてきぼりにしたところ、先回りして長屋に帰ったこの男に仕返しをされてしまう、という話が落語「大山詣で」である。この落語に描かれる江戸の庶民の旅や背景にあるオヤマ信仰などを論じているのが本論である。

「大山詣り」に描かれる、この江戸っ子の一行も先達が同行している団

体での旅なので、「講社（講中）」による旅と思われる。講とは、ムラや町内を基盤に相互扶助と親睦を目的として組織される。その中で、神社・仏閣への参詣や寄進などをする信者の団体に伊勢講、大山講がある。本論では大山講の発達や大山の御師についても述べている。

■ 作者

「大山詣りと講社の旅」の著者である神崎宣武（かんざき・のりたけ 1944-）は、民俗学者で、武蔵野美術大学在学中より宮本常一に師事した。現在は旅の文化研究所の所長を務める。主な著書に『「うつわ」を食らう』（吉川弘文館 2017）、『江戸の旅文化』（岩波書店 2004）、『物見遊山と日本人』（講談社 1991）、『観光民俗学への旅』（河出書房新社 1990）などがある。

編者の旅の文化研究所は、平成5年（1993）7月1日に設立され、移動・旅・観光に関連する諸問題を主な研究対象としている。研究所としての恒常的な研究プロジェクトである「特定研究」と日本の大学院に在学する学生を対象とした「公募研究」の二区分で調査・研究事業を展開している。

参考文献

田中宣一「相州大山講の御師と檀家：江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐって」（『日本常民文化紀要』no.8(2) 成城大学大学院文学研究科 1982）[Z051.3/129]

平野榮次「富士講・大山講の巡拝と遊山」（『地方史研究』vol.48(4) 地方史研究協議会 1998）[Z210.05/4]

『定本落語三百題』武藤禎夫著 岩波書店 2007 [913.7/112]

<落語を読む>

『五代目古今亭生全集 第4巻』川戸貞吉・桃原弘編 弘文出版 1977 [913.7/29/4]